２　次の文章は、鎌倉時代初期の成立とされる物語評論『無名草子』の一節で、あるの女房たちが歴史上の有名な女性について、さまざまな批評を語り合っている場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

〈富山大〉二〇二一年度出題

　「皇后宮、上東門院、いづれか今少しめでたくおはしましける」と言へば、「皇后宮、御みめもうつくしうおはしましけるとこそ。院も、いと御志深くおはしましける。せさせ（ア）たまふとて、

　　知る人もなきれにいまはとて心細くも思ひ立つかな

　　夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき……⒜

などませたまふらむこそ、あはれにはべれ。に御覧じけむの御、まことにいかばかりかはあはれにおぼしめされけむ。

　さて、御わざの、雪の降りければ、

　　までに心ひとつは通へども我がみゆきとは知らずやあるらむ……⒝

と詠ませたまへりけむも、いとこそめでたけれ。おはしまさぬまで、さばかりの御身に、御目も合はずおぼしめし明かしけむほどなども、①返す返すもめでたし。

　また、隠れさせたまひ、また、流されなどして、御世の中へさせたまひて、かすかに心細くておはしましけるに、それがし（イ）参りて、のそば、風に吹き上げたるより見たまひければ、いたく若き女房の、清げなる、七八人ばかり、色々の、、などもあざやかにてさぶらひけるもいと思はずに、今は何ばかりをかしきこともあらじ、と思ひあなづりけるも、あさましくおぼえけるに、庭草は青く茂りわたりてはべりければ、『②などかくは。これをこそ払はせておはしまさめ』と聞こえたまひても、宰相の君となむ聞こえける人、『露置かせて（ウ）御覧ぜむとて』といらへけむこそは、なほりがたくいみじくおぼえさせたまへ。

　上東門院の御事は、よししなど聞こゆべきにもあらず。何事もめでたきためしにはまづ引かれさせたまふ時なれば、とかく申すに及ばず。

　③何事も御幸ひめさせたまふあまりに、御命さへこちたくて、あまたの帝におくれさせたまふこそ、しくはべれ。そのたびに、いとあはれなる御歌ども詠ませたまひたるは、やさしくこそはべれ。

　一条院隠れさせたまひて、

　　逢ふことも今はなきの夢ならでいつかは君をまたは見るべき

など詠ませたまへるも、いとめでたくこそはべれ。

　　　　　　　（中略）

　何事よりも、④優なる人多くさぶらひけむこそ、いとど心にくくめでたくおぼえはべれ」と言へば、「その御ののと聞こえさするにこそ、いと華やかに、もの好みしたる人々多くさぶらひけれ。もその宮の女房なるべし。折々の女房の、なども、ためしなきほどに制を破り、女房のなどしけることも、いとおびたたしくはべりけれ。

　には、⑤さばかり名を残したる人々さぶらひけれど、さやうのことなども、人の目驚くばかりはあらじ、とつつませたまひけむほど、さまざま、心の色々見えて、めでたくこそはべれ」

注　○皇后宮――藤原定子（九七六～一〇〇〇）。藤原道隆の娘。一条天皇中宮、のちに皇后。

○上東門院――藤原彰子（九八八～一〇七四）。藤原道長の娘。一条天皇中宮。父の権勢により先に入内した定子を皇后にし、かわって中宮となる。

○院――一条天皇。

○御わざ――御葬送。

○御目も合はず――お眠りにもなれず。

○中関白殿――藤原道隆。道長の兄。

○内大臣――藤原伊周。定子の兄。

○頭中将それがし――頭中将某。「それがし」は不定の人物を指す。

○宰相の君――定子づきの女房。藤原重輔の娘。

○御命――ご寿命。

○枇杷殿――藤原妍子。彰子の妹。

問１　傍線部（ア）・（イ）・（ウ）の敬語は、誰から誰に対する敬意を表すか、それぞれ答えよ。

問２　⒜の和歌について、主語を明らかにしたうえで、現代語訳せよ。

◎問３　傍線部①において、語り手が「返す返すもめでたし」とする理由を⒝の和歌の内容を踏まえて説明せよ。

問４　傍線部②について、指示語の内容を明らかにしたうえで、現代語訳せよ。

問５　傍線部③について、主語を明らかにしたうえで、現代語訳せよ。

問６　傍線部④の「人」、⑤の「人々」はいずれも上東門院に仕えていた女房らを指している。このうち代表的な人物の名前を漢字で書け。

問７　語り手は上東門院について、どのような点を評価しているか、具体的に説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　（ア）＝語り手から皇后宮　　　（イ）＝語り手から皇后宮

　　　（ウ）＝宰相の君から皇后宮

「語り手」は「ある邸の女房たち」「女房」も可。「皇后宮」は「定子」も可。

問２　Ａ一晩中契りを交わしたことをあなたさまがお忘れでないのなら、Ｂ私が死んだ後であなたさまが私を恋しがって流す涙の色を見たいものです。

Ａ＝５〔「契りを交わす」「将来を誓う」「愛を誓う」がなければ０。「あなた」「帝」などがなければ０。「忘れずは」を訳していなければ０。「一晩中」「夜通し」などに訳していなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「自分の死を悲しんで流す涙」の意味がなければ０。「ゆかし」を「見たい」と訳していなければ減点２。〕

問３　Ａ帝が、皇后宮の葬送の夜降った深い雪に自らの御幸を重ねて、自分の心だけは皇后宮を見送っているという歌をお詠みになり、Ｂ夜もお休みになれないほどに悲しまれるほど Ｃ皇后宮への愛情が深かったことが知られること。

Ａ＝４〔帝が「心は皇后宮の葬送に加わっている」と詠んだことに触れていること。「深い雪に御幸を重ねた」という記述はなくてもよい。〕

Ｂ＝４〔帝が夜も眠れないほどに深く悲しんだことに触れていること。〕

Ｃ＝２〔「皇后宮が帝に愛されていた」も可。「～から」という形でも可。〕

問４　Ａどうしてこのように庭草が茂ったままにしているのか。Ｂこれを払わせておしまいになればいいのに

Ａ＝６〔「庭草が茂ったままにしている」という内容がなければ０。〕

Ｂ＝４〔「払わせる」と使役に訳していなければ減点２。尊敬の訳がなければ減点２。〕

問５　Ａ上東門院が、何事もお幸せをお極めになるあまりに、Ｂご寿命までも甚だしく長くなり、そのせいでＣたくさんの帝に先立たれなさったことは、耐えがたいほど残念なことです

Ａ＝４〔「上東門院」「彰子」がなければ０。尊敬の訳がなければ減点２。〕

Ｂ＝２〔「こちたし」を「長い」という意味に訳していなければ０。「さへ」の訳がなければ減点２。〕

Ｃ＝４〔帝に先立たれたという意味の訳がなければ０。尊敬の訳がなければ減点２。「口惜し」の訳がなければ減点２。丁寧の訳がなければ減点２。〕

問６　紫式部

和泉式部・赤染衛門なども可。

問７　Ａ一条天皇を始め多くの天皇が亡くなるたびに感慨深い歌を詠み、Ｂ多くの有名ですぐれた女房たちに囲まれていたが、Ｃ派手なことを慎む人柄であった点がすばらしいと評価している。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４　（ＡＢＣとも同様の内容であればよい。）

【現代語訳】

　（ある女房が）「皇后宮（＝藤原定子）と、上東門院（＝藤原彰子）と、どちらがより少しすばらしくていらっしゃったか」と言うと、（別の女房が）「皇后宮は、ご容貌も愛らしくていらっしゃったと（聞いている）。院（＝一条天皇）も、たいそうご愛情が深くていらっしゃった。（皇后宮が）お亡くなりになるということで、

　知る人が誰もいない（あの世への）別れて行く旅路に、今は（もうこれまで）と思って、心細くも（旅立つ）決心をすることです。

　問２一晩中契りを交わしたことをあなたさまがお忘れでないのなら、私が死んだ後であなたさまが私を恋しがって流す涙の色を見たいものです。

などとお詠みになっているというのは、しみじみと胸に染みることでございます。後に（この歌を）ご覧になったという帝のお気持ちは、本当にどれほどしみじみと悲しくお思いになったことだろうか。

　さて、（皇后宮の）御葬送の夜、雪が降ったので、

　（私は、皇后宮の火葬が行われる）野辺まで心だけは（ついて）行くが、（そこに降り積もった深い雪が、天皇の身ゆえ葬送に参列できないこの）私の行幸だと（誰も）知らずにいるだろう。

とお詠みになったというのも、たいそうすばらしい。（皇后宮がこの世に）いらっしゃらない後まで、（天皇という）あれほどの（高貴な）御身で、お眠りにもなれず（皇后宮のことを）お思いになりながら（夜を）明かしたというほど（の皇后宮への愛情の深さ）なども、重ね重ねすばらしい。

　また、（皇后宮の父の）中関白殿（＝藤原道隆）がお亡くなりになり、また、（兄の）内大臣（＝藤原伊周）が流罪になりなどして、（一家の）御名声が衰えなさった後、（皇后宮が）ひっそりと心細い様子でいらっしゃったところに、頭中将某が参上して、簾のそばで、風で吹き上がったところから（中を）ご覧になったところ、たいそう若い女房で、さっぱりと美しい人が、七八人ほど、色とりどりの単襲や、裳、唐衣などもきわだって美しい様子で伺候していた様子もたいそう意外で、（名声が衰えた）今はどれほども風情あることはないだろう、と（皇后宮を）軽く考えていたのも、あさはかなことと思われたが、庭草は一面に青く茂っていましたので、『問４どうしてこのように（庭草が茂ったままにしているのか）。これを払わせておしまいになればいいのに』と申し上げなさっても、宰相の君と申し上げた女房が、『（皇后宮が）露を（草に）置かせてご覧になろうとおっしゃって（そのままにしているのです）』と答えたというのは、やはり昔と変わらずすばらしいことと心におとめになる。

　上東門院の御事は、善し悪しなどを申し上げるべきことでもない。何事にもすばらしい（ことの）例として最初に引かれなさる時勢なので、あれこれ申し上げることなどできない。

　問５（上東門院が、）何事もお幸せをお極めになるあまりに、ご寿命までも甚だしく長くなり、（そのせいで）たくさんの帝に先立たれなさったことは、耐えがたいほど残念なことです。（天皇に先立たれなさる）そのたびに、たいそうしみじみとした御歌の数々をお詠みになったのは、すばらしいことでございます。

　一条院が崩御なさって、

　（この世で）逢うことも、今となってはなく、（あなたを恋しく思って）泣きながら寝て見る夢の中でなくて、いつあなたの姿を再び見ることができるでしょうか。

などとお詠みになったのも、たいそうすばらしいことです。

　　　　　（中略）

　どんなことよりも、すぐれた女房たちが多く伺候したということが、ますます奥ゆかしくすばらしく思われます」と（ある女房が）言うと、（また別の女房が言う）「その御妹の枇杷殿（＝藤原妍子）の皇太后宮と（世間の人が）申し上げる方のところには、たいそうきらびやかに、風流を好んだ女房たちが多く伺候していたということだ。大和宣旨もその（皇太后の）宮の女房なのであろう。（何かある）時々の女房の装束や、出し衣なども、（それまでに）例がないほど（派手なことを禁ずる）禁制を破り、女房が一品経供養などをしたことも、たいそう数多くあったということです。

　上東門院には、あれほど（後世に）名を残した女房たちが伺候したが、そのような（皇太后宮のような）ことなども、人が見て驚くほどのことはするまい、と遠慮なさったということは、さまざまに、（上東門院自身の）心がけの数々が見えて、すばらしいことです」